

戦争とこころ

岡本道雄先生 インタビュー

I n t e r v i e w

聞き手

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)

内田由紀子 (こころの未来研究センター助教)

京都大学元総長で京都大学名誉教授の岡本道雄先生は94歳のいまも哲学書を読み、科学技術文明と人類の将来について考えている。

「人間は大きなこころを持った、共生を本質とする生命体である」と考える岡本先生にお話をうかがった。



哲学を学ぶ

吉川 岡本先生は94歳になられたいまも、多くの本を読み、思索の毎日を送っておられるとうかがい、本当に感銘を受けました。

岡本 私はいままで忙しくて勉強する時間がなかったんですが、2002年、88歳の暮れに左脚の血栓で京大の神経内科へ運ばれ、入院中の骨折もあって3年間入院していました。そのあと家で2年間療養しましたから、5、6年近く入院・療養していたんです。その間に少し暇ができたので、本を読んで、これまでできなかったことを勉強しました。それは3つありました。

その1つは大学紛争です。私は1973年12月から1979年12月まで京都大学の総長を務めました。当時、京大ではまだ大学紛争が続いていました。しかし、私の専門は解剖学で、学生が言っていることの哲学的背景が十分わかりません。それで、この機会に、あそこ学生は何を考え、何を訴えようとしていたのか、その哲学を勉強しようと思ったのです。

もう1つは京都学派。西田幾多郎先生(1870-1945)の西田哲学を一通りは理解しないとイケないと思っております。

そこで、大学紛争については、ドイツのマルクーゼ(Herbert Marcuse 1898-1979)という哲学者を中心に、彼の哲学の基礎と経過を知るために、プラトンの哲学から始め、ヘーゲル、マルクス、ハイデッガー、現存のハーバーマスまで読んできましたが、ここ1、2年は西田哲学を自分なりに勉強しています。

最後の3つめは古い問題ですが、絶えず気にしていることがあるんです。私は総長を辞めてから東京へ行って、中曽根康弘総理が会長の科学技術会議の議員を10年やりました。その当時、皆様ご存じの心臓移植が問題になりました。腎臓移植から始まって、心臓の移植、肺の移植、最後は脳の移植までやろうというような趨勢でした。

それは近代の科学技術文明と人類の将来の問題です。人類はこのまま行っていいのだろうか。これが当時から大きな疑問でした。



こころの未来研究センターへの期待

吉川 去年7月のこころの未来研究センター設立シンポジウムのときに先生が来てくださって、「ぜひがんばっていい研究をするように」と励ましてくださいました。そのころはまだたった4人のスタッフしかなくて、どうなるんだろうと内心、心細く思っていたものですから、本当にうれしかったのです。1年経って、いまようやくスタッフも9名に増え、元気が出てきたところです。

岡本 21世紀は「こころの時代」と言うとき、東洋的というか、日本的というのか、穏やかな柔らかなものを期待しておられると思うんです。こころの未来研究センターでは、そういうものも大切にしながら、こ

ろは人間の特徴なのだから、人間をしっかり見つめることですね。その点、大変大きい目的をもって出発されたんだから、こころからお祝いしたい気持ちでいっぱいです。

吉川 ありがとうございます。科学技術の進歩とこころの問題も大きなテーマになりますし、日本人にとって、たとえば宗教というのはどういう意味があるのかとか、どんなふうにかこころの研究が進めていけるのかとか、いろいろな課題を根本のところから考えていくセンターにしたいと思っています。

岡本 そうですね。いま、おっしゃった宗教はもちろん、教育も人間の問題です。私は日本の大学の研究にはちょっと疑問を持っているんです。いまは主として西洋人の創ったディシプリン(学問分野)にのってその一部を研究するのが日本の大学の研究の主流になっているでしょう。そして、小

さな学位論文をまとめて博士になったらそれで一応研究したという。そういう研究ではだめで、1つの新しいディシプリンを創立するくらいの意気込みで研究することが大切です。

たとえば、病院に行くと医者は私の体を診ません。コンピューターを見て、私のほうをちらちらと見て診察したことになっているけれど、自分で本当に患者に触らないと、発見とか発明というものはありません。病気の名前でも、パーキンソン、アルツハイマー、欧米人の名前のついたものはいろいろあるけれど、日本人の名前のものはごくわずかです。

何かを発見するには、現物にしっかり触れないとだめなんです。大学というのは本来そういう研究をやる



ところだったんですが、日本は明治維新で欧米の文化を受け入れたときから、外国のディシプリンを取り入れ、それに則った研究をやるのが普通になっている。

こころの研究をやるからには、こころとはなんだろうという根本的な問題にも真正面から当たっていく必要があります。心理学、神経学、認知科学等々、それらの一部分をやって、これがこころの研究です、ということではいけません。粹にはまった研究を繰り返すだけでは大学として惜しい。何かの研究センターを開いたら、1つの目的をもって真正面から当たって20年やってみて、目的が貫徹できなかつたら潰すくらいのつもりでやることです。

なぜ私が西田哲学をやるかといったら、西田先生は日本の哲学をつくらうとしておられた。仏教、禅もやり、西洋哲学、東洋哲学の勉強もして、先生はそれらをアウフヘーベン（止揚）して新しい哲学をつくらうとしておられた。これこそ大学の役割ですから、こころの未来研究センターもそういうところにしっかりと目を向けてほしいと思っています。

平和ボケの学生たち

吉川 先生が総長のころと比べて現在の大学生はいかがでしょうか。

岡本 私は、長く学生と接していませんが、いまは一種の平和ボケだと言われていますね。私が総長のときには、学生はこんなにおとなしいものではなかった。私なんか命懸けていたんです。

1977年6月18日の京大創立80周年記念日に、京大紛争の中心人物竹本の処分を決める評議会を学内で開くことを決意し、その前日、総長として3年ぶりに正式に大学へ帰ってきて、学生と団交を始めました。すると、紙つぶてが飛んでくる。その中には石が入っている。それくらい激しい学生だったんです。私は度胸がないものですから、母の遺骨をお守りに持って行きました。そして、「自分は何も恐れない」と自分に言い聞かせて法経第一教室の教壇に学生部長と2人で上がっていききました。

それに比べると、いまの学生は本当におとなしい。平和だから無理もありません。平和と云って、本当はいまこそ大変なだけども。

人間の実存を家族、国家、世界（人類）と3段階に分けると、いまの学生は、自分の私生活、家族や友人、そういうことばかりに終始していて、国家、世界、人類というようなものに考えが及ばない。人間は一段階上のところに目標を置くと立派にやれるんです。一家族でありながら

国のことも考える。国民でありながら世界のことを考える。

吉川 家族まで考えがおよばまだよいかもしれません。自分、自分という人が多くなってきているように感じますね。

岡本 そうそう、個人主義で、自分のことばかり考えて暮らしているでしょう。私の哲学の第一歩は、人間は独りではない、類的存在であるということをはーゲルから学びました。

それから、大学が法人化して、昔の大学とはずいぶん変わりました。昔の大学はまだドイツの真似をしていましたから、「象牙の塔」みたいなところがあった。一方、学問に対しても戦前は旧制高等学校もあって、哲学にも力を入れていました。

私はいま、人文系の研究者はもっとしっかりしないとイケないと思っています。自然科学のほうは産学協同といって、すぐ実用になるものをやるために一生懸命になっているでしょう。もちろん、それだけではいけません。人文系の人はいま一番われわれに迫っている、社会的、世界的、人類的問題は何かということをしっかり考えて、体を打ちつけるくらいのつもりで思想、哲学をつくらないとイケません。

政治の世界でも、国際会議のまえ、首相や大統領などが2人のみで会うでしょう。そのときに人格が触れ合うんです。西洋では、一般教養の中にギリシャ哲学などが入っている。プラトンを読むと、いま社会で起こっているようなことがみんな書いてあります。その対処の方法まで詳しく。

内田 先生のご著書の中で、プラトン（紀元前427-紀元前347）が親殺しのことを書いているというお話がありました。

岡本 いまと同じで、子殺し、親殺し、みんなある。西洋では一般教育の中で古典を習っています。日本では古典はあるが活かされていない。

人間の教育をしないままで専門教育に入っていく。そして、科学をやり技術をやる。むちゃくちゃなんです。教育改革などで内閣が変わるたびに審議会をつくって対策を講じているだけではだめなんです。日本の教育をいっぺん根本的に考える。明治維新でも外国からのプレッシャーによる開国でしょう。戦後の体制はもちろんアメリカ主導、教育改革はいつも外部のプレッシャーで急いで始めている。

プラトンは「本格的に考えるとは哲学をすることである」と言いました。哲学というのは真剣に考えて、実行に移す前にもう一度立ち止まってしっかり考えて、そして行動する。日本はそのへんが欠けている。これは大変重大な問題だと思っています。

戦争とところ

吉川 先生は、人間のこころについて、どんなふうにお考えでしょうか。

岡本 そもそも、人間がなぜこころを持ったかという、その根本は人間が他の人間と共生するためです。しかし、それと同時に、他の人間と

戦うという戦争と関係があるんです。動物はふつう同種を殺し合いません。生殖のときにちょっと殺し合いをするんですが、本格的な殺し合いはしない。それをするのは人間だけです。ヒトは誕生以来、戦争をして人間になってきました。どうしてこころが発達したかはそれと関係があるらしい。こころがあるから最初は言い合いをする。殴り合いをする。次に武器を使い、死ぬか生きるかだから、考えて考えてどんどん脳が大きくなったのではないのでしょうか。

人間は本来いつでも一生懸命というわけにはいかない。平和なときにははっきりしない。日本では、平和になって武士が戦わなくなっても、こころだけは「武士道」と言って、その道徳を持ちあげている。人間はやっぱり命懸けでないとだめなんです。ソクラテスやプラトンでも、ゲーテでもヘーゲルでも、皆これという仕事をしたのは戦争のときです。その戦争を否定し、共生の方向に導くのが教育です。その大方針を教えるのが宗教です。教育も宗教もあってもなくてもいいものではない。人間にこころがあるかぎり絶対必要なものです。共生そして文化の方向へ。

内田 先生は「人間は大きなこころを持った、共生を本質とする生命体である」と書いておられますね。

岡本 大きなこころを持っていることが人間の特徴なんです。その本質は共生と戦いで、共生は文化の源です。それが同時に戦争への源でもあるのです。

京大の霊長類研究所で、チンパンジーや類人猿などがどこまでこころを持っているかを調べている。その結果、彼らもこころの芽のようなものを持っていることが分かってきました。それでも、人間のこころとは桁が違う。なぜ人間はこんなに大きなこころを持っているのか。それはやはり人間は文化を創り、戦争をするからだだと思います。

私がなぜ戦争に興味を持ったかという、1830年、ナポレオンがワイマールへ攻めてくる。そのとき、ゲーテ（1749-1832）も戦争に行つて負けるんです。その夜、みんながしゅんとしているとき、ゲーテは「諸君、いまここから世界史が始まるんだ」と叫んだ。これは有名な話なんです。戦争をして人間は初めて自分以外の国の国民のことを知るし、これがやがて世界文化の始まりになるという考え方をしている。

ヘーゲル（1770-1831）も同じです。ナポレオンがイェーナに攻めてきて、軍靴の音を聞きながら、『精神の現象学』という彼の終生の名著を書いて、その原稿を出版社へ持っていく。戦争を人間の運命であるように考えていたのです。これで人間の世界が広げられ、「人間は類的存在である」とする彼の『精神の現象学』もこのようなところから生まれたのでしょ。人間と戦争はずっとこうして続いてきて、いまもどこかでやっているでしょう。

人間はふだんは穏やかにしていても、いざとなったら殺し合いをする。それは決して珍しいことではない。人間の本性の中には恐ろしいものがあるということを見無視してはいけな

この出発から共生の方向へいくのが文化の芽です。

これも霊長研の諸君が詳しく調べています。感謝の気持ちがあると、チンパンジーでも親が他から攻撃されるとちゃんと守るらしい。動物にも愛されれば返す気持ちはあります。人間は母親から愛されて、感謝する気持ちがどんどん発展していく。これが人間です。そして、人間の存在は孤独ではないんだと気づく。ヘーゲルの『精神の現象学』は、「人間は類的存在だ、独りではない」と言います。

人間がこころを持ち始めたのはまだ500万年前のことです。生命が生まれた38億年前から今日までを1年とすると、人間がこころを持ったのは昨晚の12時ちょっと前。だから、人類はまだ若いと思いたい。それで失敗もするけれど、よく反省して、立ち直らないといけません。ゲーテも、ヘーゲルもそのような路を歩んだのです。

哲学というのは人間が悲しんだときに強くなる。西田哲学がやっぱり悲しみの哲学で、西田幾多郎先生の私生活は恐るべきものです。奥さんを亡くして、お嬢ちゃんがほとんど全部亡くなる。そして、ご自分が生き残って、それをじっと耐えておられる。その悲しみからあの哲学が生まれた。

人間はこころを持つ。そして、人間には残虐な本性がある。これは否定できない。しかし、その反対の共生を目標にして文化をつくる。人間とは何だというときに、そういうところから出発していくわけです。教育、宗教、こころを持っていなければ、こういうものは成り立たない。こころを持っているということは大きいですね。フォイエルバッハ(Ludwig Andreas Feuerbach 1804-1872)のDie unvergängliche Jugend der Menschheit(人類の不滅の青春)を信じましょう。

人間は類的存在

岡本 しかし、本来人間は独りではない。ヒトはオギャアと生まれてお母さん^{おちい}と対したときに初めて人間になります。そのときにお母さんは本能的に子どもを愛する。その愛情が、子どもの親への感謝の気持ちに伸びていくか、単に可愛がられて終わりが問題です。



ヘーゲル

西田幾多郎
(提供:石川県西田幾多郎記念哲学館)

い。これはあなたがたのほうが専門ですね。

しかし、日本は不戦の憲法をつくりました。不戦というのは人類の理想です。共生と戦いをいっしょにもつことを本質にした、大きなこころを持つことができるのが人間なのです。だから、「人間は大きなこころを持った、共生を本質とするべき生命体である」という定義から出発せよというのが私の主張なんです。

共生へ導くのが人間教育

吉川 日本人の宗教についてはどうお考えでしょうか。

岡本 私は特に信仰はないんですが、ヘーゲルの『精神の現象学』を読んでから、人間は類的存在だということを考えて、いまは自と他というものにあまり区別を感じません。だれにでも親愛な気持ちを持っています。

問題はやっぱりこころなんです。こころは自由で、どの方向へでも行ける。だから、人間のこころは悪魔でもあるし、天使でもある。その自由なこころ、闘争本能を持った人間を、いままでの経験によって、共生のほうへ導いてやるのが人間教育であると私は思います。

そんなことで、私はこころの未来研究センターは大変期待するところが大きいんです。

吉川 学問に携わる者は、まず哲学的な考え方をきちんと学ばなければいけませんね。

岡本 哲学はやらないといけません。ヘーゲルやカントを読むのも、彼らの頭の使い方を習うためなんです。

私がこころの未来研究センターへの期待が大きいのは、次のような理由もあります。

先に私は戦争とこころということをお申しましたが、それにはもう1つ大きな歴史物語があるのです。しかも私たちに近い歴史です。それは1932年、国際連盟はアインシュタイン(Albert Einstein、1879-1955)に向けて、「あなたの、人類のため

の一番大きな問題は何ですか。そして、そのあなたの質問は誰に聞きたいですか」という内容の親書を出しました。アインシュタインの質問は「ヒトはなぜ戦争をするか」であり、彼の選んだ相手はジークムント・フロイト(Sigmund Freud、

1856-1939)でありました。アインシュタインは人類の知の峯として、戦争について考え得るあらゆる原因を網羅しています。これに対してフロイトは、彼の知識の限りを尽くして応えていますが、何といたってその中心は彼の心理学、性の衝動と破壊、死への衝動を問題として、人間のこころの存在の根本に立ち返って、文化と戦争の関係を論じています。その結論は、簡単な1行、「人間文化の発展を促せば、戦争は終焉へ向けて歩み出すことができる」(Alles, was die Kulturentwicklung fördert, arbeitet auch gegen den Krieg.)のみでした。この結論に達するまでに、フロイトは文明がエロスの衝動を抑圧することと、死の衝動が内化して少子化になることを挙げています。このことを考えると、フロイトの最後の1行の返答は、恐るべき人間の未来をも予言するものでした。

はじめ私は、この問題を取り上げて、こころの専門家である皆様と今後の議論を期待しましたが、まず原書(『ヒトはなぜ戦争をするのか?』浅見昇吾訳、2000年、花風社)を読んでいただいた後にしようかと考えるに至りました。しかし、私の余生も短いので、賢明な諸君の奮起を切に願っています。それは、こころの未来研究センターの課題がいかに広く、深いものであるかを示しています。これがわたしの、こころの未来研究センターへの熱い願いです。**内田** またぜひお話をうかがう機会をつくっていただければ幸いです。**吉川** 先生の期待をしっかりと胸に刻んで、真剣に取り組みたいと思います。**岡本** いつの日か再び会いましょう。その時は、できることなら私はアインシュタインにさせていただき、そして皆様は多くのフロイトとなって答えてください。では、またお目にかかりましょう。**吉川** はい、先生にいただいた大き

な宿題に対する私たちの答えを聞いていただき、先生と議論できるようになる日まで、ぜひ、お元気でいらしてください。今日は長時間、本当にありがとうございました。

(2008年6月16日、日独文化研究所にて)

「ヒトはなぜ戦争をするのか?」表紙
アインシュタインとフロイトの往復書簡

岡本道雄(おかもと・みちお)

1913年、京都府舞鶴市生まれ。京都帝国大学医学部卒業。同大学院特別研究生修了(脳神経解剖学)。京都大学総長、科学技術会議議員、臨時教育審議会会長、医道審議会会長、財団法人稲盛財団会長などを歴任。現在、京都大学名誉教授、日独文化研究所理事・所長などを務める。勲一等旭日大綬章受章。ドイツ連邦共和国功勞勲章大功勞十字星章受章。